

特集 3／営農型太陽光発電の現状と課題

“地域の未来”という視点から、誰と、何を考えるのか

東京大学大学院農学生命科学研究科助教

岩崎 茜

話題提供の視点

岩崎と申します。この後のディスカッションへの視点の提供という役割も含めて、ごく簡単なプレゼンをさせていただこうと思います。

私自身がどういう視点を持っているかということのお話を最初に少しさせていただくと、環境問題に関わるワークショップや対話の場作りにこれまで関わってきて、サイエンスコミュニケーターという役割の仕事をこれまでできております。

気候市民会議のファシリテーションにもいくつか関わらせていただいたりして、多様な市民の意見を政策に反映させるような取り組みであったり、あるいは脱炭素社会をつくるというような、2050年あるいはその先という超長期的な未来の社会をどう考えるかというようなことに、これまでコミュニケーターという役割で関わってきた立場にあります。

そういう中で、自ずと脱炭素社会を実現する手段としての営農型太陽光発電の持っている可能性、エネルギー政策も含めて、その可能性への期待というのを持っていた立場だったのですが、違う視点を得るような機会というのが実はありまして、ちょうど実は1年前に、私が今関わっている教育プログラムのセミナーで、馬上さんにご講演いただいたことがありました。

私の所属先が農学部ということもあって、聞いている学生や教員には、農業、あるいは農村のあり方に関心があったり研究している立場の人たちが多かったもので、馬上さんの講演を通して、農という視点からこの営農型太陽光発電を

考えるという機会に私自身が恵まれました。

馬上さんの今日の講演では、あまりこの視点のお話がなかったかなと思うので、この後のディスカッションでぜひお話ししたいなと思っているのですが、私自身がすごく印象的だったなと思うのは、営農型太陽光発電というのは一体誰が担い手となる事業なのか、その「誰」というのが、実は問題になっていて、はっきり決まっているわけではないということでした。

誰が担い手になるのか

それはつまり、農業自体の担い手が、今、日本では減少しているということと、あるいは農村のような地域からどんどん若い世代が流出していつている中で、地域とか集落というのを今後担う人たちも減っていつている中で、営農という視点から見ると、担い手となる人たちは一体どこにいて、それは誰なのかという課題があるというお話だったと思います。

そもそも農村というものを残していこうと思うのか、あるいはその地域自体をどういう形にしていきたいと思うのか、つまり地域の問題と向き合うことが、この営農型太陽光発電のひとつの側面であるということ、私自身が学ぶ機会になり、エネルギー政策とか、脱炭素社会の実現という視点以外の側面からこの地域を捉えることに関心を持つようになりました。営農型太陽光発電は、地域のあり方の問題だというのは、当たり前のように、私にとっては大きな気づきだったかなと思います。

農林水産省のウェブサイトを見ても、「地域の方々の理解を得ながら事業を進めていくことが重要です」と書かれていて、地域の理解が重要視されている。しかしながら私は、どういう意味でそれは地域の問題なのかがあまりまだ具体的に分かっていないので、地域という視点で見た時のお話は、この後のディスカッションでぜひお聞きしたいと思っています。

私なりの解像度で見た時の地域の問題だということのひとつは、地域に住んでいる誰もが関わる問題としての景観ということがあると思います。これまでも、太陽光発電のソーラーパネルが景観を阻害するものとして反対されるトラ

ブルが多いことはよく聞かれていることだと思うのですが、私が参照した、小田原市でのソーラーシェアリングに対する住民の受容に対しての調査を行った研究の結果によると、耕作放棄地という地域の課題があり、それをそのまま放置しておくよりは、ソーラーシェアリングという、耕作放棄地の再生につながるような形で事業を行うことに対しては、住民が好むという調査結果があるということがありました。

そうすると、事業そのものへの住民の理解を広げていくということを考えた時に、よく、売電利益とか、経済的なメリットを強調されるということがありますが、地域としてのメリットとしていわゆる、環境問題を考える上での教材的なものとして期待をし、その地域の魅力とか、地域の価値みたいなものを考えていくひとつの事例として営農型太陽光発電を活用することが大事ではないかということが、私が参照したこの研究からは示唆されていました。

これまでの発表の中にも、相乗効果だとか、付加価値という、営農型太陽光発電によってもたらされるメリットをどう捉えて、伝えていくかというお話もありましたが、地域にとってどんな価値があるのか、メリットがあるのかを伝えていくことが必要だと思います。

地域にもたらす価値は

それとともに、環境問題という視点でのクリーンなエネルギーとしての価値付けとかエネルギーの地産地消みたいなのところも合わせて伝えて住民に伝えていくこともあり得ると思いました。

相模原の事例で、ソーラーシェアリングをしている下を共同で管理する農地として、地域コミュニティの人たちが農業にも参画しながらその事業に参画していくという話もありますが、その地域の人たちにとってのメリット、地域のコミュニティにとってのメリットという視点で伝えていくということもあると思います。

地域の担い手となる将来世代も

最後にですが、将来世代のことを考えるというのは、私がこれまで関わってきた気候変動問題を考えるいろんな対話の場でやってきたことなので、この問題についてもぜひ提示した上でディスカッションにつなげたいと思っています。農業の担い手が消失している、今それがすでに問題になっているのに、地域の未来には担い手で誰がいるのかということがあると思います。

地域の担い手となる若者はある一定数いるわけなのですが、営農型太陽光発電の事業がどのぐらいの将来を見据えてされている事業なのかは、私はわからないのですが、今そこに住んでいなくても、移住等でこれから関わるかもしれない人々も、地域のこれからの担い手のポテンシャルを持った人材として入ってきますし、あるいはまだ生まれていないけれども、将来この地域の担い手となり得る後世の世代というのもあると思います。

地域のあり方の中に営農型太陽光発電を位置付けて、どうしていくべきかを地域として考えるという視点も必要だと思っています。

農林水産省が出している様々な優良事例で、いすみ市の五平山農園が取り組んでいる、「若者が安定した収入を得ながら農業で食べていける姿をつくりたい」が、事業の目的のひとつになっているのですが、農業ということが必然的に前提とされた上での地域なのか、そうすると、農業への理解とか営農力を高めるようなことが必要なのか。農業のあり方そのものが国全体として変わっている中で、農業をどう捉えていくかということもあるかと思います。現在の世代もそうだし、これから将来の世代がどう考えるだろうということも想像しながら考えていくということも必要なのではないかと思っていますので、ぜひ、この後のディスカッションで皆様のご意見も参考にさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

(いわさき あかね)